8月下旬、きびしい日差しの照りつける京都。数多く残るモダン建築の取材に訪れた。

四条大橋のたもと、鴨川を挟んで斜めに向かい建つ東華菜館とレストラン菊水（ともに1926年竣工）。編集者との待ち合わせにも都合のよいこのあたりの宿を探した。祇園のAPホテルを避けて見つけたのは、四条通から花見小路に入ってすぐ右に折れた路地奥の宿。なぜか三方向からの入り口があり、ロビーにはシルバーのロールスロイスが止まり、木製の大きなパラゴンスピーカーが置いてある。規模の割にはエレベーターは2基。部屋と浴室は奇妙なほど広く天井も高いが、仕事に適したデスクはない。全体に他の用途から転用された感がある。サービスはよく、朝食もついて一泊6千円と格安（予約サイト価格）。5日間の取材拠点としては快適だった。

撮影初日、菊水の1階で早めの夕食をとった。京都出身の編集者さんも実は初めて入ったとのこと。カツレツ、エビフライと迷った末にクリームコロッケ。家族でのお出かけ帰りに立ち寄りたいような、昔ながらの洋食レストランだった。

写真と文 筒口直弘

7月27日。すでに猛暑。

ビールを頼むとグラスにはネギの切れっ端が付いていた。友人らに目で合図すると、「こうでなくては」とでも言いたげに笑う。

このお蕎麦屋さんの掃除の行き届いてなさ……いや、きっとホコリや小さなゴミなどはすでに「年季」の間に挟み込まれて、取り除くことはできないのだろう。

まずは大好きな青唐辛子入りの卵焼き（この日は5人で3回も頼んでしまった）、その後にアサリの醤油漬けが来た。そこへ小蝿が3匹ついてくる。やっとこ手でつまんだと思ったら眼鏡にもう1匹とまるという具合で、退治しても退治しても、新しい注文が厨房から運ばれて来る度に小蝿もついてくる。前回訪れた4ヶ月前にはなかったアウトな状況にたじろぐ。壁にベタベタと貼ってある手書きのメニューを見てふと漏らしてしまった。

「この店には、刺身はないんだね」（あって欲しくないという意味）。

すると別テーブルで、お客さんと談笑していた女将さんが急に立ち上がり「ありますよ～お刺身、最後の一皿。どう？最後だから量もあるよ」と言った。

ドキドキ刺身の三種盛りは、マグロ、カツオ、イカ。心配をよそに、もっちりぷりぷりで非常にうまい。

透明感の消えたクリアファイルには、小さい字で埋め尽くされた地酒の一覧表。選ぶのが面倒になり「おすすめ」でお願いすると、店主が一升瓶を抱えてやって来る。とっくりの首、ひたひたまで注いでくれて650円。こんなに安くていいのか。汚れたエプロンと対照的な笑顔の清潔感。「もう少し綺麗にすれば、東京屈指の名店になるのに……」などと思う客は道理がわかっていない。そんなことをすれば生々溌剌たるありのままの姿にとどめを刺して、この店は死んでしまうだろう。ご馳走様でした。

絵と文 伊野孝行

夏の思い出 丹下京子

17年くらい前 ある暑い夏の日の午後

シュー

ママ ママ むぎちゃ むぎちゃー

わかった わかったから 待ってて

私は 耐熱ガラスを 信じすぎていた

ママ ママ どしたの

パーパー

ピキ ピシ

ピシ

こっち来ちゃ だめだってっ

危ないから 絶対来るなっ

なんで なんで

なんで

ちぇ…

なんだか きれいだな

小さかった娘も今や21歳。結局育児は、人生は、何ひとつ思い通りには行かないのであります！

あんた 統治ちゃんと やってんの？ ねえ、聞いてる？

ねえ

ちょっと

ねえって

あぁ… ふーん

育児も仕事もうまくいかない日々。悔しい。情けない。それを吐き出す場所もない。飛び散った麦茶とガラス片を見つめてわあわあ泣いた。散々泣いて涙も止まったので周りを片付け、娘の手を引いてよろよろと皮膚科に行った。熱々の麦茶をもろに被った両太腿の火傷は治るのに2週間以上かかった。痛かった。（娘は無傷）当時のことは大半忘れているけれどこの日の出来事ははっきり覚えている。

絵と文 丹下京子

炎暑の新宿で、山下清生誕100年展「百年目の大回想」を観た。生誕80年の展覧会には日下さんと行った。わたしはよく覚えているのに日下さんは全く記憶にないようだ。清の貼り絵を観たのはそのときが初めてで、それまでは画集をじいっと眺めていた。貼り絵で作品をつくるようになったのはその頃のこと。さて、20年ぶりに見る山下清の貼り絵。やっぱりわたしは学園にいたころの絵が好きだ。紙の色は200年後も残っているだろうか。新宿で絵を観た2日後、わたしは湯布院の湯の坪街道を歩いていた。観光客が多く、じりじりと暑い。ふと見上げた電柱に「山下清原画展」という案内を見る。涼みたい一心で「昭和館」の2階にある常設スペースに入った。どことなくオーラのない清の絵が並んでいる。眺めているうちに、もやもやしてきてスマホを取り出す。そして、公式サイトの「贋作に注意」という文章を見つける。ここの絵のことかはわからない。わからないけれど、新宿で見た絵の記憶まで色あせてしまう気がして、また炎天下の通りに戻った。

絵と文 **霜田あゆ美**

父は西瓜が好きだった。晩年、足が弱って西瓜を買いに行けなくなった父に、親孝行のつもりで1/8カットの西瓜を買って帰ったことがある。パック入りのサイコロ西瓜ばかり食べていた父は、鋭角にカットされた西瓜の歯触りが嬉しかったのか「うまいわー」と喜んでくれた。その3ヶ月後、父はあっけなく逝ってしまった。

今年の夏、私は病を得た。治療のため、父の3回忌の法要の予定が立たなくなり、母はさっさと中止を決めた。盆の入りの 8月13日は父の誕生日でもある。生きていれば88歳、米寿だった。未だに納骨にも行けず、仏壇も用意できず、居間のテーブルに置かれたままの父の位牌に、せめて西瓜を供えたかった。でも、なんとなく買いに行くのが面倒で、結局、何もしなかった。16日の夜、YouTubeで「大文字焼き」の中継を見ながら、あの世へ帰る父のしょんぼりした姿を想像した。「ごめん。来年はちゃんとするから」と、心の中で詫びてみた。

絵と文 **大高郁子**

西岡琢也
「他よりマシ」なベストワン

N'S COLUMN 25

上映前は静かにすごしたい。これから観る映画の音楽が流れる。作品への期待が膨らむ。『女囚さそり』（72〜73）の時タバコ臭い東映の劇場に、梶芽衣子の「恨み節」が流れてるなんて最高だった。

最近はやたらうるさい。大音量でガンガン映像を流す。東宝シンデレラが「幕間の時間を利用して、ハリウッドから最新の情報をお届けします」と始まる。見たくもない。あのネェちゃん、「マクアイ」と読むって知らなかったんだろうなぁと毎度思う。

続いて予告編の連発。反射的に目を閉じる。CG頼みのアメリカ映画、お粗末な日本映画。日本の俳優の滑舌の悪さがよく分かる。やっと本編が始まるぞと思ったら、例のサイアクの〈映画泥棒〉！　また目を閉じ耳まで塞ぐ。上映直前に視覚・聴覚をぐちゃぐちゃにされたくない。平静な気持ちで本編を迎えたいんだ。〈映画泥棒〉ってそっちでしょ？

目を閉じれば「あざやかな場面」が見えると阿久悠は書いた。耳が聴こえないとどんな世界なんだろう。昨年の映画賞を総なめした『ケイコ　目を澄ませて』（22）は、聴覚障碍者の女性ボクサーを描く。遅ればせながら配信で観た。

映画史は、音のない（無声）色のない（モノクロ）短い映像から始まる。いきなり白い布（スクリーン）に蒸気機関車の疾走が映し出され、見物は腰を抜かした。ホースで水を撒かれ体をよけた。そんな逸話が残っている。

その後音（トーキー）を、色彩（カラー）を獲得する。映像重視なので音楽映画やミュージカルはともかく、音（聴覚）に焦点を当てた映画は少なかったが近年、『エール！』（14）『ギルティ』（18）『サウンド・オブ・メタル』（19）等、秀作が立て続けに公開されている。

原作があり実話の映画化なのだろう。実在のモデルへの配慮からか、聴覚障碍者の実相が伝わらない。作り手たちに、音を失った人の住む世界への想像力が欠けている。

まず主人公（岸井ゆきの）がボクシングを始めた理由が分からない。劇中にも台詞があるが、ハンディキャップが大きいのは想像がつく。健常者でも過酷な競技なのだ。なぜそこに彼女は飛び込むのか。途中でボクシングを、ジム（あるいは両方）をやめようとするが、その時の彼女の気持ちも不明。

手話・筆談はあるが、僅かな相槌以外ほとんど音としての言葉を発しない。だから彼女の心の内を知るためにジムの会長夫婦（三浦友和・仙道敦子）、母（中島ひろ子）や弟、その恋人を配置してあるのだが、主人公に型通りの対応をするだけ。弟が弾くギター＝音の世界も活かされないし、恋人とのダンスシーンもただの座興でしかない。主人公の単独シーンもいくつかあるが、効果的と思えない。

途中から会長の病気の進行が描かれるが、主人公の会長やジムへの思いが明確でないので、主筋と絡まり合わない。三浦も岸井と芝居の質が違いすぎて、わざとらしさばかり目立つ。他の達者なはずの俳優たちも魅力がない。

前記の秀作は〈音〉と格闘していた。本作もまた、音のない世界（リング）で戦う女しか知りえない聴覚が描かれると期待していた。自らの鼓動が、肉の軋みが、飛び散る汗がどんな〈音〉を発するか知りたかった。聴覚障碍者のボクサーという設定は、そのために用意されたのではなかったのか。

滅びかけた世界では、「他よりマシ」と言う相対評価にすぎない過大評価が横行している。

にしおか・たくや　1956年、京都府生まれ。脚本家。代表作に『ガキ帝国』『TATTOO〈刺青〉あり』『沈まぬ太陽』『はやぶさ〜遥かなる帰還』、TVドラマ「京都迷宮案内」シリーズ、「返還交渉人」など。

鮎川誠（シーナ&ロケッツ）
Ayukawa Makoto
1948-2023

森英二郎
思い出のクリフォード⑨

鮎川誠は70年代、サンハウスというブルースロックバンドのギタリストでした。それまでこんなカッコええ日本のロックンロールなミュージシャンは見たことがありませんでした。それからすぐに派手なヨメさんとシーナ&ロケッツというバンドを組んだとき、いっぺんにミーハーなファンになりました。それから20年近くたって、一度だけ彼らと言葉を交わしたことがあります。大阪の春一番コンサートの会場の外でタバコを吸ってたら目の前に鮎川誠とシーナもタバコを吸いにきたんです。僕は思わず、ファンです、このコンサートのポスターの絵を描いてます！と言ってしまいました。なんせミーハーなファンですから。そしたら鮎川さんは、そう、いいねぇ、とあの独特なイントネーションで言ってくれはりました。

もり・えいじろう　1948年、京都府生まれ。関西のタウン情報誌「プレイガイドジャーナル」の表紙、野外コンサート「春一番」ポスター、『荷風と東京「断腸亭日乗」私註』（川本三郎 著）、絵本『おとうさんのうまれた うみべのまちへ』など。

日日読書
大西良貴
22

おおにし・よしたか　1974年、京都府生まれ。京都嵯峨嵐山にある古書店London Books店主。文芸書を中心に、人文書、美術書、絵本、サブカルチャーなどを扱う。観光客と地元の人に支えられ営業を続ける。

London Books
616-8366　京都市右京区嵯峨天龍寺今堀町22

吉田健一『金沢／酒宴』
講談社文芸文庫／1990年

最初に読んだ吉田健一の本は『絵空ごと／百鬼の会』の文庫で、人によっては悪文と言うかもしれない、うねくねとのたくるようなセンテンスの長い文章に魅了された。

「金沢」は、金沢に古びた一軒家を借りた主人公の中年男性が、知人の骨董屋に案内されるままに、邸宅や料亭を訪れ酒宴を繰り返す、という長編小説。主人公の過去も、語り手の立場も、時空の設定も曖昧なまま、ほとんど飲んでばかりいる、というふしぎな小説だが、無為を極めてゆくかの至福の時間が描き出される。

併録の「酒宴」は、語り手の男が銀座裏で飲んでいて隣り合わせた神戸の酒造会社の技師と仲良くなり、別の店でも一緒に飲み、ついには列車に半日揺られて神戸まで同行、酒工場を見学した上、また飲み続ける、という話。そこでの酒宴の人たちの姿がやがて大酒のタンクに変わってしまうという奔放さ、時空を超えてどこまでも自由がふくらんでゆく感じは、さながら『千夜一夜物語』のようだ。

「発見」されたくはないね

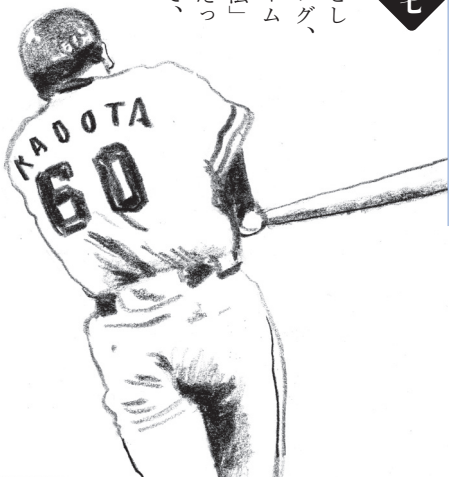
関川夏央　昭和残照 十七

身長170センチ、プロ野球選手としては小柄なのに常にフルスイング、キャリア24年で史上3位、567本のホームランを打った門田博光も、「マサカリ投法」の200勝投手・村田兆治と似たタイプだった。負けん気と実績がもたらした自信家で、家庭では典型的な「亭主関白」だった。

キャリアを始めた南海ホークスが1989年に消滅、福岡に移ってダイエー・ホークスになったとき、門田はあえて関西に残ることを選択、神戸のオリックス・ブレーブスに移籍した。単身赴任を嫌い、また中学生の娘を転校させたくなかったからだという。

門田博光は1948年の早生まれ、村田兆治より学齢で2年上だ。南海時代、選手兼監督だった野村克也から、江夏豊、江本孟紀とならんで問題選手とみなされたのは、自分の打点を稼ぎたい4番打者の野村が3番の門田に、本塁打ではなくヒットを狙って塁に出ろとしつこくいったのに、門田がフルスイングをやめなかったからである。

ともに「団塊の世代」の村田と門田は現役時代、重大な故障を経験している。村田は83年、当時はまだ危険とされた右肘のトミー・ジョン手術をアメリカで受け、門田は79年、アキレス腱を断裂して1年間欠場した。二年後に復帰した村田は10勝をあげ、門田は1年の空白ののち、32歳の80年に41本塁打、ともに「カムバック賞」を得た。



門田は88年、40歳の年に本塁打王（44本）と打点王（125点）になり「中年の星」といわれた。89年と90年にも本塁打30本以上、打点90以上をたたき出したが、91年、オリックスからダイエー・ホークスに移り、92年、44歳で引退した。村田は2005年に、門田は06年に殿堂入りしている。

引退後も鍛錬を欠かさなかった村田だが、97年、47歳のとき心筋梗塞を起こし、門田は50代となった2003年と05年に小脳梗塞を経験した。現役時代から酒量が尋常ではなかった門田は、引退と離婚のあとは浴びるようにビールを飲んで糖尿病を悪化させ、晩年は週三回透析に通っていた。

ふたりの最大の、そして最も痛ましい共通点は「発見」されたことだろう。良妻の評判高く、手術で渡米したときも堪能な英語で村田を助けた元キャビン・アテンダントの夫人は、成城の家を出ていた。門田も、最晩年は兵庫県西端の小さな町でひとりで暮らしていた。

2023年1月23日、透析予定日に門田が現れない。病院が警察に安否確認を依頼、門田は倒れた姿で発見されたのである。74歳であった。今年8月、NHK・BSの「球辞苑」に出演した3年前の門田の姿を流した。それは「自打球」の回で、「プロテクターなどない時代、極端なクローズドスタンスの自分は自打球をよく脚に当てたが、それを恐れていてはホームランを打てないよ」と饒舌で、元気そうだった。

「男は外で働いて家族を養う。そのかわり家の中のことは一切しない」という「亭主関白」が、男性のひとつのあり方だと認識されていた時代がたしかにあった。「昭和」が去って久しいのに、古い文化の檻の中でそんな「生活習慣病」を生きて、ついに家族から見放されたこともふたりに共通していた。

せきかわ・なつお　1949年、新潟県生まれ。作家。代表作に『海峡を越えたホームラン』（双葉社／第7回講談社ノンフィクション賞）『「坊っちゃん」の時代』（双葉社／谷口ジローと共作・第2回手塚治虫文化賞）、近著に『人間晩年図鑑』シリーズ（岩波書店）。

イラストレーション……南伸坊

杉涼し美女と生れて春日巫子

岡村堇太

前回、昭和初年の段階にあって、星野麦人一派の句はどうしようもなく古いという意味のことを述べた。とはいえ、「木太刀の人々とその主張」（『俳句講座』第八巻）で紹介される四十人弱のうちに惹かれる人がなかったわけではない。岡村堇太および小西米太である。

堇太はキンタと読むのか。奈良の人。麦人は、〈堇太に逢ふと彼は少年のあどなさを思はしむる温容を持つて居るが、俳句の上には鋭覚のはげしいものを持つて居る、壮快なるものを思はしめる〉と述べて、作品を三十六句も挙げる。他は多くて二十余句、たいては十句内外で済ませているから破格の厚遇だ。結社の重鎮というのではなく、むしろキャリアは浅そうな口ぶりなので、本当に期待していたのだろう。

掲句は読んで字のごとしで、春日大社（当時は官幣大社春日神社）の巫女を詠む。神楽など祭事の場面としてもよいが、境内を一人歩む美しい巫女を見かけた、くらいの方が「杉涼し」の収まりはよさそうだ。上五を形容詞の終止形で切り、句末を体言止めとした俳句の典型文体。中七下五の一直線の断言が、彼女の美貌への感嘆を生き生きと伝える。ええ、まあ、ルッキズムですが、好色という以上に、春日社の氏子である奈良町の住人としてのご当地自慢の気配が強いようにも思う。

鴈来るや海のあえぎの雨細く
鵙なくや針走らせて畳さし
川の洲の夕焼藪や鳥渡る
緋牡丹や目を射るものに日のほむら
この夏のこれを挽歌や蔓を焼く
堀修理の礫とあはれ凍蛙
風の精木の精冬の月をゆく

六句目は「修理」をシュリと約めて、ホリシュリノ・ツブテト・アワレ・イテカワズ。堀を修理していたら、土のなかに冬眠中の蛙。工夫がそれを礫のように投げ捨てた。可哀そうに！　七句目は、寒月の夜空を轟々と行く木枯しを詠む。思わず正徹の〈吹きしをり野分を鳴らす夕立の風の上なる雲よ木の葉よ〉を連想した。これは夏の歌ながら、風と吹き飛ばされる木の葉に寄せる詠嘆は共通しよう。どの句も言葉のスピード感が素晴らしいが、俳句史には痕跡を留めない。早世したか、俳句を廃してしまったか。

米太は京都の人。〈京の言葉で、京の人の心を、京からはなさないでゆく〉と麦人。

春雨や別して叔母は京女
夏蝶や小さな花にかぶさりて
灯籠が歩きさうなり虫の声
はつ結の髪が三人とも違ふ

一句目、京都人である作者から見ても別して京女だと言わせる叔母、なかなかに怖い。二句目の夏蝶は大きな揚羽蝶か。「かぶさりて」が巧み。三句目、もの凄いような虫の声に灯籠も浮足立ちそう。四句目は若い娘たちのスナップ。いずれも繊細巧緻、官能的な感覚の冴えを見せる。

はれのち句もり 十七

高山れおな

たかやま・れおな　1968年、茨城県生まれ。俳人。「豈」「翻車魚」同人、朝日俳壇選者。年頭に出した『尾崎紅葉の百句』に続き、所属の同人誌に掲載する「澤好摩の百句」を脱稿した。澤さんの作品から一句――〈うたたねの畳の縁を来る夜汽車〉。

イラストレーション……二宮由希子

メモランダム・本のデザイン 17

「室内」その2

（工作社）

日下潤一

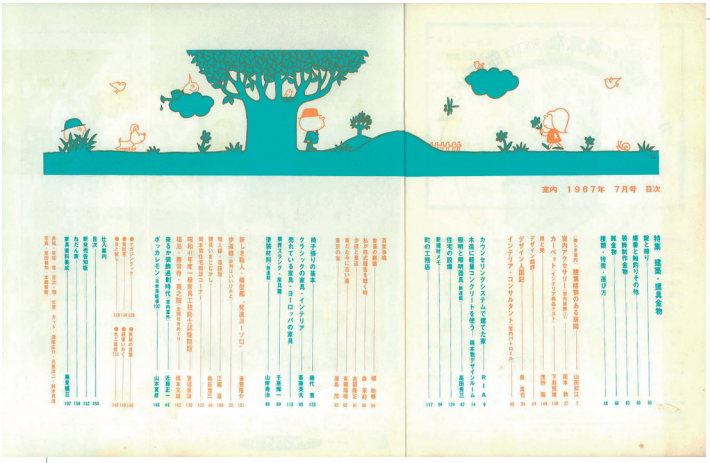
渡辺力の表紙／右からNO.139（この号は何故か月号数字とNOがない）、NO.142、NO.144

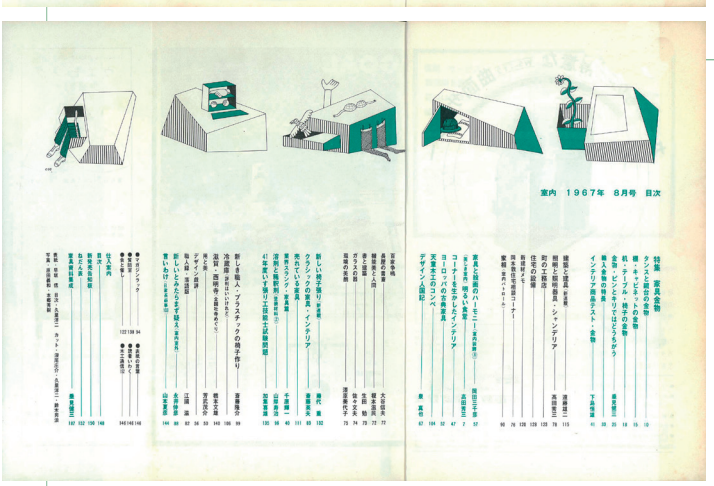
前回のNO.151（1967年7月号）のほか、京都のウンベルトからお借りしたNO.146（1967年2月号）、NO.152（1967年8月号）NO.164（1968年8月号）が手元にある。151号の目次は佃公彦、146号と152号は久里洋二の絵。

146号の泉真也の連載「デザイン人国記」、和田誠は「才人集団の観のあるライト・パブリシティでも、この人群を抜いている」「（和田は）横尾忠則を評して「横尾忠則に、円熟する日は来ないであろう」と書いているが、和田も才能にまかせて巧みに自分を使いわけ、なかなか正体を見せない。いささか才に走る危険はあるが、この異才自己の世界を主張して、メルヘン風な絵本を、七冊も自費出版するような一徹なところもあり、どこまで大きくなるか楽しみである」のだと。

河野鷹思、福田繁雄、伊藤憲治、勝井三男らも紹介され、「最近エドワーズのイラストレーションで、一躍衆目を集めた伊坂芳太良」、石岡瑛子については「（日宣美の「特選」で）出だしがあまりにも鮮やかだったので、この人つぶれるのではないかと思ったが、企業人としても成長しつつある。この勉強家の才女、昨夏はご存知前田美波里のポスターで、日本中の若者の胸をかきむしった。」とある。

1967年7月号（NO.151）





二つ折の目次／上・1967年7月号（NO.151）下・1967年8月号（NO.152）

164号には「デザイン人国記・関西」で、田中一光、永井一正、片山利弘、横尾忠則が紹介されている。「田中には現代的なセンスなどはないので、田中のモダニティーというのは、古い日本の伝統そのものの持っているモダニティーなのだ。実は、田中一光の素晴らしさというのは、この一点にある。（略）田中ほど総ての世界を、自分のわくの中で安定して表現出来るデザイナーはいない。色彩といい形といい、すべては田中一光の世界だ。それでいて、田中一光のものではなく、日本の伝統そのものだという感じがいっぱいだ。」

「室内」は「木工界」改題「室内」になった61年4月号の76号から144号まで表紙は写真だ。66年からは早坂信（しん）の絵に変わる。146号の巻末コラム「日常茶飯事」に山本夏彦が書いている。「渡辺力さんは、本誌七十六号から一四四号まで五年九ヶ月、六十九冊、表紙を構成したひとである。（略）本誌の表紙は、稀れに「ドムス」に似たり、「暮しの手帖」に近かったこともあったが、次第にその域を脱し、ついに渡辺力その人と化した。」「それならなぜ、この一月号から、表紙を一変するか、写真を、画に改めるかと問われても、私は返答に窮する。それがリトル・マガジンの使命だと答えるよりほかはない。真の百万大雑誌には、こんな冒険は許されない。読者を失う恐れがあるからである。むろん、本誌にもそれがないわけではない。幸か不幸か、本誌はそれが許されるか許されぬかの境目—すれすれにいる。それなら冒険しなければならない。本誌は常に新しい才能を求めている。」

1969年、表紙はまた写真にもどっている。69年1月号NO.169はカラフルなキャンドルの写真。今月は2ページもらえたから、60年代の「室内」の中身をすこし。大宅文庫で検索すると創刊号の「木工界」はなく、1973年以降のみ。国会図書館には全冊そろっている。時間をつくってじっくり60年代の「室内」を眺めてみたい。

魚の環世界 24

魚住寧子

タイトルレタリング……ヨコカク（岡澤慶秀）

ウンベルト　Umwelt Textiles & Objects
604-0962　京都市中京区夷川通
御幸町西入逢磨町588-1

縦10.5cm　横15cm　厚み0.7cm

うおずみ・やすこ
1977年、兵庫県姫路市生まれ。Umwelt Textiles & Objects店主。学生時代にテキスタイルを学ぶため、デンマークへ留学。帰国後、古美術店に勤めたのち2012年、京都・夷川通にUmweltを開く。

Färger（ファリエ）はスウェーデン語で複数の色を指す単語です。単色だとFärg（ファーリ）。この小冊子SVENSKA LANDSKAPS FÄRGERはタイトル通り、スウェーデン各地の風景の色彩をめぐるガイドブックです。地域ごとの観光名所や特徴的な風景・文化とともに、それらの色を14冊のシリーズで紹介しています。色はスウェーデン工業規格採用のNCS（Natural Colour System）に基づいて分類されています。

初めて見つけたのは10年ほど前、手工芸が盛んなダーラナ地方にある小さな工芸博物館でした。ミュージアムショップで絵葉書の横に並んでいたのが、写真下の開いた冊子です。見開きの左ページの解説はスウェーデン語と英語併記、右ページの写真と分類された色はどれも美しい。私の好きな堀内誠一による『配色の手帖』やル・コルビュジエの『Polychromie architecturale』に加え、新しい色見本帖を手に入れた気持ちになりました。

写真上のスコーネ地方の冊子は友人のアンナさんからのプレゼント。下のダーラナと見比べると、全体的に色が淡い印象を受けました。そして何度も旅をするうち、確かに街並みの色合いが地方によって異なることを実感するようになりました。また、刺繍や織物なども好んで使われる色彩に地方による違いがあります。これからも買い付けをしながら、いろいろな風景をめぐる旅は続きます。

今月のあとがき

今号はみなさんの「夏の思い出」。筒口さんの写真、「菊水」は屋上でビアガーデンもやっているらしい。来年の夏に挑戦したい。SOMPO美術館の山下清展には最終日に息子と一緒に。100分待ちと表示されていたが、60分で入場できた。結局、最後のショップのレジに40分並んだので合計100分。清の放浪の理由が、戦争にいきたくなかったからだと初めて知った。空襲の絵の炎の赤、ぼけの花と空の青、長岡の花火を見上げる人々のうしろ姿が心に残る。すばらしい展覧会だった。（赤波江）

E.Mori

また訃報。フィリップ・プティ・ルーレさんが亡くなった。私より4歳下。70歳、8月3日、大動脈破裂。奥様の貴田奈津子さんとの仕事の縁で、長年のファンの彼に会えた。パリの自宅と京都で。シンプルな線、モダンでユーモアがある。8月3日に京都駅で彼の描いた大きな広告の絵を見た。ある新書のシリーズのカバーの絵を長く描いてもらった。関川さんの『石ころだって役に立つ』カバーの絵も彼。悼。みんな長生きして、いつか会えると呑気に思っていた。会えないコロナの三年を恨んでも仕方ない。（日下）

オリジナリ
Originally October 2023
2023年10月15日発行　〈ロゴデザイン〉ヨコカク　〈編集・デザイン〉赤波江春奈＋日下潤一　〈印刷・製本〉グラフィック　〈発行〉ビーグラフィックス
©B GRAPHIX 2023, Printed in Japan　【無断転載禁止】
◆Web＝bgraphix.com　◆Twitter & Instagram＝@bgx_book_design　◆日下潤一のブログ＝www.bgx.jp/blog/
「オリジナリ」はBGXが毎月発行するペーパーです／90部／お問い合せは akabae@bgx.jp まで

うちの6才になる子どもは、武器が好きだ。戦いも好きだ。

一緒に『君たちはどう生きるか』を見にいった。感想を聞くと「弓矢つくるところが一番よかった。ほかは全部忘れちゃった」と言った。ええ～、そこだけ？　それは、少年がはじめて自分の武器を手にするシーン。

東京国立博物館「古代メキシコ展」では、アステカ文明の〈鷲の戦士像〉に釘付けになっていた。嘴の中に顔がある。等身大で作られた戦士の顔は、無表情で不気味。常設展では、刀剣の前からしばらく動かなかった。「お母さんは土偶見ててもいいよ、ぼくはひとりで剣見てるからさ！」と明るく言われる。

100円ショップのおもちゃコーナーには、いろんな武器がそろっている。弓矢、日本刀、ピストル。カラフルな武器たちはみんな「我々はおもちゃですから」と無害そうな顔をしている。うちには、折り紙の手裏剣や、息子の手作りの剣が大量にある。武器って、そんなにたくさん必要かなぁ。

毎日「お母さん、〝戦いごっこ〟しようよ」と誘われる。使うのはプラスティックのおもちゃの剣。ときどきラップの芯も剣になる。「お母さん、戦うのは好きじゃないからイヤ」と断りたいが、ひとりっ子の息子には、家の中に遊び相手がいない。

「ハイハイ、お母さん斬られる役でいい？」と進んで斬られる方になるが、もっと真剣に斬られてくれと指導される。「お手本見せてあげるから、お母さんはぼくのこと本気で斬ってよ」とニコニコ言われて、どんな顔して息子を斬ったらいいのか困る。

おもちゃでも、刃物やピストルを我が子に向けるのには抵抗がある。死んだフリをなかなかやめない時、「やめなさい」と硬くて低い声が出る。フリだとしても死なないで。ヒートアップして強めの攻撃を受けると痛い。おおげさに痛がると、あ、やりすぎちゃったな、という顔をしてごめんと謝る息子。

「そんな遊びは危ない」「戦いごっこよりもっと楽しいことがあるよ」とおもちゃの武器をとりあげることもできるけど、それでいいんだっけ。戦っているとき、息子はとってもたのしそうだ。

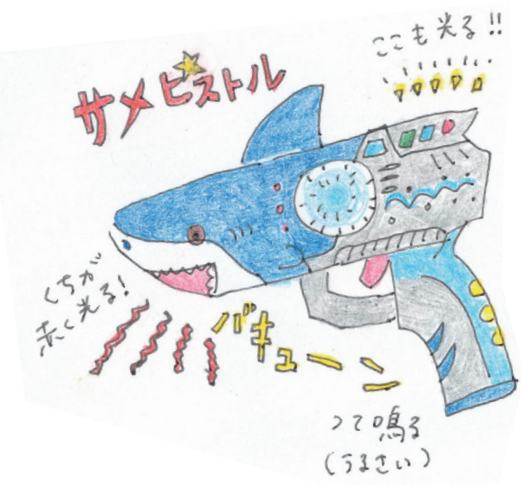
体の痛みはそのまま心の痛みになること。ひとを傷つけると、自分の胸も苦しいこと。〝戦いごっこ〟はそれらを知るための練習かもしれない。

よちよち歩きをはじめた頃、公園の遊具で遊ばせながら、自分が息子に「危ないよ～」しか言っていないと気がついてハッとした。転んで痛い思いをしないと、なにが危ないのかわからないじゃないの。

あらゆる暴力や危険からできるだけ子どもを遠ざけておきたい。どうか不幸な目に合わないでと、先まわりをして、危険の種をとりのぞこうと手を出してしまう。だけどそれって、本当に子どものためになるだろうか。

ほどよく痛みを経験していけたらいいけれど、いまこの世界では、ふとしたことがきっかけで、どん底まで堕ちていってしまいそうでおそろしい。かんたんに加害者にも被害者にもなってしまうんじゃないか。そんなうす暗い不安に包まれている。

きっと数ヶ月も経てば、ほかの遊びに夢中になっているにちがいない。親がこうして悩んで立ち止まっている間に、子どもは猛スピードで、前へ前へと進んでいってしまう。



文と絵 赤波江春奈